平成２９年度 由布市コミュニティスクール・セミナー報告

１　目　的

現在、由布市では小・中学校１４校のうち１１校がコミュニティ・スクールをスタートしており、残りの３校も来年度実施に向け、推進委員会を設置し準備を進めている。すでに地域との活動が始まっているところがあったり、どんなことで協働できるかを模索中であったりしている。

そこで今回のセミナーでは、協働することのよさの再発見をテーマに「地域と学校でどのような協働ができるか」「協働するときに大切にすべきこと、留意すべきこと」「地域への呼びかけ方・広げ方」などについて、会場の皆さんとも論議し、コミュニティ・スクールの活性化を図るために実施た。

２　テーマ　「再発見！コミュニティ・スクールの活かし方」

地域と学校で協働したことによって得られたもの、得られるものの具体を明らかにしながらコミュニティ・スクールのよさを再確認し、新たな取組への意欲を喚起する。

３　日　時　平成２９年８月２日（水）　１４：００～１６：３０

４　主　催　由布市教育委員会　　大分大学高等教育開発センター

協　力　ＮＰＯ法人大分県協育アドバイザーネット

５　会　場　はさま未来館　２階　大研修室

６　参加者　○由布市内全小中学校の教職員及び学校運営協議会委員　５６名

７．講　師

・中川忠宣（大分大学ＣＯＣ＋推進機構 特任教授）

・梶原敏明（文科省 CS マイスター）

・伊藤俊昭（佐伯市立宇目緑豊小学校 校長）

・安達美和子（別府市立石垣小学校ＣＳ学校運営審議会委員）

（ＮＰＯ法人大分県協育アドバイザーネット事務局長）

課題：コミュニティ・スクールを進めている上で困っていること、教えてほしいこと

教育長に最後まで参加していただき、事前に各学校から提出していただいた課題ごとに登壇者から報告や説明をしていただく形式で実施しました。多くの課題があったためにじっくりと協議する時間はありませんでしたが、一応のアウトラインについての事例や考え方を紹介していただきましたので、今後の、各学校でのコミュニティ・スクールの運営に生かしていただくことが出来ると思います。

以下、課題ごとの説明の一部を紹介します。

１．コミュニティ・スクールをスタートしましたが、なかなか地域の方々との協働ができないでいます。

①地域の方々との協働が、時間的余裕をつくれず、できてないのが現実です。特に中学校では部活動等で時間がとれないなか、先進的なコミュニティ・スクールでは、例えば、中学校では、どんな協働を行っているのか具体的事例があれば教えてください。

＜説明＞

コミュニティ・スクールを何故するのかを共有する必要がある。双方向で、学校や子どものために何をしていけばよいのかなど、地域と学校が、学校の問題点や課題を共有して協働するということがスタートである。このことからもわかるように、コミュニティ・スクールは目的ではなく、ツールの１つである。まずは「話合い」から始めて欲しい。

②小学校は、読み聞かせや学習サポーターのような形で学力向上に向けた協働もできやすいのですが、これ以外にも学力向上につながる具体例があれば教えてください。

＜説明＞

例）幼稚園生に、学校で勉強するために必要なことを説明するという単元があるが、説明の練習の段階で地域の人に聞いてもらうことによって子どもたちの説明は上達する。

例）音読の練習では、グループに分かれ、各グループに地域の人にサポーターとして関わってもらうことによって、声を出して読むことが上達した。

例）算数では、〇付けや定規の使い方にサポーターとして関わってもらうことによって子どもたちは上達し、担任は全体の指導に集中できる。

③コミュニティ・スクール(学校運営協議会)で話し合われたことが教職員になかなかうまく伝わらなくて困っています。教職員が納得して協働するのに時間がかかるのです。何かよい方法があれば教えてください。

＜説明＞

＊運営協議会の委員が学校の課題について熟議し、さらに、教師との合同の熟議により教師の想いや学校の内情を理解することができる。そのうえで、地域として何が出来るのかを

考えることが大切である。管理職や先生方の思いが運営協議会に伝わることが基になり、運営協議会の役割が明確になってくる。

＊計画から３年目になってようやく、運営協議会として、先生方の職員会議の時間の「朝のスキルアップタイム」への参加（見守り）の活動（朝先生）をすることが出来るようになった。

＊受け入れる先生と支援者のコーディネートが大切で、そのためにコーディネーターがうまくマッチングしないと中々難しい。

＊教職員は不安を感じて中々受け入れようとしない。その不安を取り除いてもらうために運営委員と教職員の熟議は大切である。

＊コミュニティ・スクールとは何か、その組織や運営をどうするか、等を考える時から教職員が一緒になって取り組む必要がある。

④いろいろなコミュニティ・スクールをご覧になってきていると思われますが、「これは面白い」とか「よく考えついたなあ」というような取り組みがあれば紹介してください。

＜説明＞

＊運営委員だけでなく、地域の多くの住民を巻き込んだ東京都杉並区立第一小学校の取り組みや、小中学校の児童会と生徒会が合同で取り組んだ事例、大学生が中学生へ、中学生が小学生への読み聞かせ等の事例等を紹介した。

＊熊本地震を受けた益城町の当時の教員と運営委員、地域住民の取り組みを紹介し、運営委員のコーディネートによって、学校と地域住民との関わりを作ってスムーズに難題を乗り越えた事例を紹介した。

⑤協働を進める際に気をつけること、大切にすべきことは、どんなことがあるのか教えてください。

＜説明＞

＊地域の人に難しいことを言うのではなく、学校の行事等の際にその都度に案内して参加してもらって、子どもや教職員と交流してもらうことが良い。その際、複雑にしないようにパターン化できるものはパターン化した方が分かりやすく、仕事量を増やさないことにもなる。

＊指導上において、教員とサポーターの役割を明確にしておくことが大切である。そのためには、担当教員とサポーターの情報交換、無理なことはしない、感謝の気持ちを忘れない、教師もサポーターも笑顔で！等が大切である。

＊地域住民が学校教育の中に入って子どもに関わるためには、サポーターとしての心得を充分に理解してもらうことが大切である。

２．地域の方々との協働を積極的に行いたいが地域の方々との協働に積極的になれない教職員が多いです。理由は、「打ち合わせなどの時間が取れない。」「さらに多忙化を招く。」からです。

①これらの壁を打開するために先進的なところは、どんな協働を行っているのか教えてください。

＜説明＞

＊公民館と学校の双方に核となるポジションを置き、双方の窓口が機能することが大切である。

＊年数が重なればパターン化して打ち合わせもスムーズになる。

＊教員が必要なサポート内容を事前にコーディネーターに伝えて、コーディネーターに上手く動いてもらうことが秘訣である。

＊コーディネーターにもサポーターとして関わってもらうことにより、コーディネーター自身がサポーターの役割を熟知し、その後のコーディネートに役立つことになる。

＊コミュニティ・スクールの全国調査から、多忙になるのは１部の担当教員だけであり、他のほとんどの教員は子どもの笑顔が生まれることによって多忙を感じていないことを紹介した。また、一部の教員のみに負担をかけずに仕事の分担の大切さを報告した。

②それが子どもたちや学校にとって、どういう良い方向に機能しているのか教えてください。

＜説明＞

＊教員が持っていない、地域の人の素晴らしさを子どもに提供できる。

＊教師が地域の人材や資源を知ることができる。

＊保護者や地域住民が学校や子どものことを知ることができ、教師の仕事内容への理解が広がる。

＊サポーターとの打ち合わせのための準備によって、授業内容を改めて考え直すことができる。

＊地域からの支援に関する全国調査から、地域住民のサポートによって、「分かるようになった」「学ぶことが楽しい」等の子どもへの効果が紹介された。また、教職員の意識改革に有効であることや、教職員の意識の共有が多方面での効果を生むこと、地域住民からの学校への信頼が深まった、等のコミュニティ・スクール導入の成果の紹介があった。

③打ち合わせの時間をどう確保しているのか、工夫しているが校の例があれば教えてください。

＜説明＞

＊事前に教員に時間がある時にコーディネーターに説明しておいて、コーディネーターがサポーターに詳細を説明する。取組が進んでも、直前の教師とサポーターの打ち合わせは必要であるが、学習内容と役割を確認する程度でいい。終了後にサポーターにコメントを書いていただくことも必要だが、無理をしないことが大切である。

＊お互いに無理をせず、「助けてもらう」「補助してもらう」「楽しむ」という意識が大切である。

＊コーディネーターの役割がとても大きく、コーディネーターに運営委員になってもらうとスムーズに進む。

＊全国的には、学校にいる事務職員がコーディネーターの役割を担う方向の取組が進んできた。

３．コミュニティ・スクール、地域協育、学力向上、学校評価の関連が十分でなく、個々の取組になっているのですっきり１本化したものにするにはどうすればよいか教えてください。

＜説明＞

＊効果を実感しながら進めていくことが、コミュニティ・スクールの効果をさらに高める事であり、長続きする秘訣である。

＊全国調査や文科省の資料を見ると、これまでの組織を見直し、統合していくという方向で動いている。

４．委員の任期について、一度に委員の方にやめられると困ってしまいそうです。（同時期に委員になられ、ぼちぼち辞退したいという声を耳にし始めているので）委員の選び方・依頼の仕方として、適切だった例、よくなかった例を知りたい。

＜説明＞

＊運営委員の選任に関する配慮事項や運営協議会の構成、学校評議員制度からの学校運営協議会への流れ等の説明があった。

＊法律改正についてコーディネーターの任用や、校長のリーダーシップが発揮できる教職員の任用を促進することとなった旨の説明があった。

５．本校では、運動会と地区交流会が小学校と地区の合同企画でおこなっており、この２つで協働していくため、区長、地区の若手の会・女性の会のリーダーに学校運営協議会委員になってもらっています。他の学校では、どのような方に委員になってもらっているのか知りたい。

＜説明＞

＊全国調査からの運営委員の立場を紹介し、コミュニティ・スクールを運営するために必要な人材を任用することが大切であることの説明があった。

＊運営協議会の役割を考えたときには、教職員が関与すべきことではない役割もあるので、市町村の教育委員会規則を策定する際には~~に~~その旨を規定することが必要である。

６．文科省や県が「チーム学校」を進め始めている。「チーム学校」を進める上での、コミュニティ・スクールの位置づけは、どうあるのが理想的なのでしょうか。

＜説明＞

＊文部科学省が進める「チーム学校」の考え方や、教員改革と地域からの学校改革の関係の説明があり、コミュニティ・スクールはそれを進めるための１つのツールであり、地域の特性や学校教育課題によってスタイルが異なってもいいのではないかという説明があった。

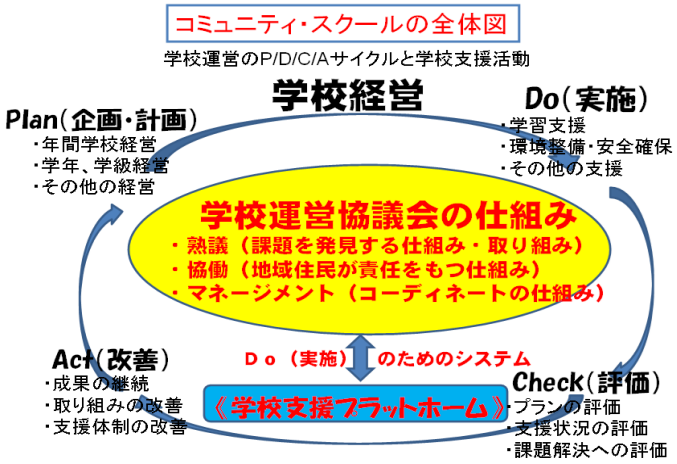
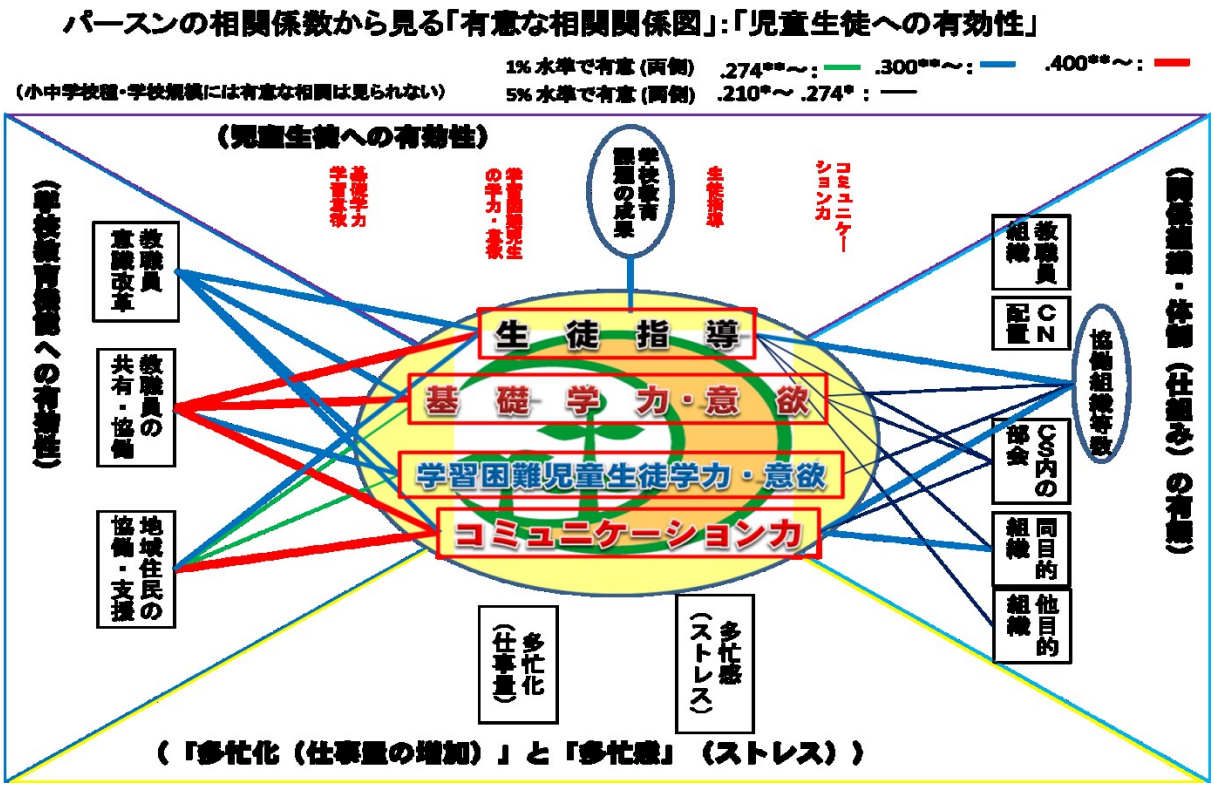
＊「チーム学校に向けての展開としては、①「社会に開かれた教育課程」における「開く」ことのポイントは教育目標等の作成におけるプロセスが大事、②教育目標作成にあたって、教職員や地域がスタートの案段階から関わる、③責任とともに実施主体者であることの当事者意識が芽生える、④学校と地域が協働で教育活動を組織的に展開されること、という説明があった。

７．学校・地域の特色、学校長の解釈の違いによって、学校運営協議会の役割や権限に、微妙な違いが出ていると思うが、それでいいのでしょうか。

＜説明＞

＊地域とともにある学校運営に欠かせない３つの機能（熟議・協働・マネジメント）については共通であり、学校の課題に対応するための方策は校長に任されている部分がある。

＊地域の特色を生かしたコミュティ・スクールを作ることが大切であり、校長の学校経営の手腕が問われる。



＊全国調査からの子どもへの効果や、こうした効果を産み出すための取り組みの具体化をどうするか、どう実践するか等を協議して、ＰＤＣＡサイクルを回していくのが学校運営協議会の役割である旨の説明があった。